

二人の若い紳士^{しんし}が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲^{てつぽう}をかついで、白熊^{しろくま}のような犬を二疋^{ひき}つれて、だいぶ山奥^{やまおく}の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを云^いいながら、あるいておりました。

「ぜんたい、ここの山は怪^けしからんね。鳥も獣^{けもの}も一疋も居やがらん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ。」

「鹿^{しか}の黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞^{みまい}もうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどたと倒^{たお}れるだろうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごついて、どこかへ行つてしまつたくらいの山奥でした。

それに、あんまり山が物凄^{ものすご}いので、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起こして、しばらく吠^{うな}って、それから泡^{あわ}を吐^はいて死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の眼^まぶたを、ちよつとかえしてみて言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしそうに、あたまをまげて言いました。はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じつと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云いました。

「ぼくはもう戻ろうとおもう。」

「さあ、ぼくもちようど寒くはなつたし腹は空すいてきたし戻ろうとおもう。」

「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに戻りに、昨日きのうの宿屋で、山鳥じゅうえんを拾じゅうえん田も買かつて帰かへれ
ばいい。」

「兎うさぎもでていたねえ。そうすれば結局おんなじこつた。では帰ろうじゃないか」

ところがどうも困こつたことは、どっちへ行けば戻れるのか、いっこうに見当がつかなくなつていました。

風がどうと吹ふいてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんと鳴りました。

「どうも腹が空ふいた。さつきから横よこつ腹が痛いたくてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。ああ困こつたなあ、何かたべたいなあ。」

「喰たべたいもんだなあ」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを云いいました。

その時ふとうしろを見みますと、立派いっけんな一軒いっけんの西洋造りの家がありました。
そして玄関げんかんには

RESTAURANT

西洋料理店

WILDCAT HOUSE

山猫軒

という札がでていました。

「君、ちようどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか」

「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだろう」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか」

「はいろうじゃないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れそうなんだ。」

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なものです。

そして硝子の開き戸がたつて、そこに金文字でこう書いてありました。

「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」

二人はそこで、ひどくよろこんで言いました。

「こいつはどうだ、やつぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんぎしたけれど、こんどはこんないいこともある。このうちは料理店だけれどもただで馳走するんだぜ」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ。」

二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になっていました。その硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」

二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから」

「ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました。」

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉をあけようとしますと、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

「それあそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りにはすくないだろう」

二人は云いながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

「注文はぜひぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい。」

「これはぜんたいどういうんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきつと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと斯ういうことだ。」

「そうだろう。早くどこか室の中にはいりたいもんだな。」

「そしてテーブルに座りたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長い柄えのついたブラシが置いてあったのです。

扉には赤い字で、

「お客さまがた、ここで髪かみをきちんとして、それからきものの泥どろを落してください。」

と書いてありました。

「これはどうも尤もつともだ。僕もさっき玄関で、山のなかだとおもって見くびったんだよ」「作法の厳しい家だ。きつとよほど偉えらい人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をけずって、靴くつの泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否いなや、そいつがぼうっとかすんで無くなつて、風がどうつと室の中に入たがってきました。

二人はびっくりして、互たがによりそって、扉をがたんと開けて、次の室へ入って行きました。早く何か暖いものでもたべて、元氣をつけて置かないと、もう途と方ほうもないことになってしまうと、二人とも思つたのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾たま丸まをここへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持つてものを食うという法はない。」

「いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。」

「どうだ、とるか。」

「仕方ない、とろう。たしかによつぽどえらいひとなんだ。奥に来ているのは」

二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいて扉の中にはいりました。

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、

ことに尖ったものは、みんなここに置いてください」

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。鍵まで添えてあったのです。

「ははあ、何かの料理に電氣をつかうと見えるね。金気のものはおぶない。ことに尖ったものはあぶないと斯う云うんだらう。」

「そうだらう。して見ると勘定は歸りにここで払うのだらうか。」

「どうもそうらしい。」

「そうだ。きっと。」

二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな金庫のなかに入れて、ぱちんと錠じょうをかけました。

すこし行きますとまた扉とがあつて、その前に硝子がらすの壺つぼが一つありました。扉には斯こう書いてありました。

「壺のなかのクリームを顔や手足にすっかり塗ってください。」
みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。

「クリームをぬれというのはどういうんだ。」
「これはね、外がひじょうに寒いだろう。室へやのなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきている。こんなとこで、案外ばくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」

二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗ってそれから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残っていましたから、それは二人ともめいめいこっそり顔へ塗るふりをしながら喰べました。

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか、

と書いてあって、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。

「そうそう、ぼくは耳には塗らなかつた。あぶなく耳にひびを切らすとこだつた。ここの主人はじつに用意周到だね。」

「ああ、細かいところまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、どうも斯うどこまでも廊下じゃ仕方ないね。」

するとすぐその前に次の戸がありました。

「料理はもうすぐできます。」

十五分とお待たせはいたしません。

すぐたべられます。

早くあなたの頭に瓶びんの中の香水をよく振りかけてください。」

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へばちやばちや振りかけました。

ところがその香水は、どうも酢すのような匂においがあるのでした。

「この香水はへんに酢くさい。どうしたんだらう。」

「まちがえたんだ。下女が風邪かぜでも引いてまちがえて入れたんだ。」

二人は扉をあけて中にはいりました。

扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。

「いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。

もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさん

よくもみ込んでください。」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんどというこんどは二人ともぎよつとしてお互にクリームをたくさん塗った顔を見合せました。

「どうもおかしいぜ。」

「ぼくもおかしいとおもう。」

「沢山の注文というのは、向うがこっちへ注文してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人にたべさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家うちとこういうことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……」がたがたがた、ふるえだしてもうものが言えませんでした。

「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」がたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。

「遁にげ……」がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押おそうとしましたが、どうです、戸はもう一分いちぶも動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚扉があつて、大きなき穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が

切りだしてあって、

「いや、わざわざご苦労です。」

大へん結構にできました。

さあさあおなかにおはいりください。」

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉めだまがこつちをのぞいて
います。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

ふたりは泣き出しました。

すると戸の中では、こそそこそこんなことを云っています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないんだよ。」

「あたりまえさ。親分の書きようがまづいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかつたでしょう、お気の毒でしたなんて、間拔まぬけたことを書いたもんだ。」

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けて呉くれやしないんだ。」

「それはそうだ。けれどももしここへあいつらがはいつて来なかったら、それはぼくらの責任だぜ。」

「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらっしゃい。いらっしゃい。いらっしゃい。」

お皿も洗ってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせるだけです。はやくいらっしやい。」

「へい、いらっしやい、いらっしやい。それともサラダはお嫌いですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげましょうか。とにかくはやくいらっしやい。」

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑かみくずのようになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

中ではふっふっとわらってまた叫さけんでいます。

「いらっしやい、いらっしやい。そんなに泣いては折角せつかくのクリームが流れるじゃありませんか。へい、ただいま。じきもつてまいります。さあ、早くいらっしやい。」

「早くいらっしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもつて、舌なめずりして、お客さま方を待つていられます。」

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのときうしろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ。」という声しろくまがして、あの白熊しろくまのような犬が二疋ひき、扉とをつきやぶって室へやの中に飛び込んできました。鍵穴かぎあなの眼玉はたちまちなくなり、犬どもはうとうとなってしばらく室の中をくるくる廻まわっていましたが、また一声

「わん。」と高く吠ほえて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりとひらき、犬どもは

吸い込まれるように飛んで行きました。

その扉の向うのまっくらやみのなかで、

「にゃあお、くわあ、ごろごろ」という声がして、それからがさ鳴りました。

室はけむりのように消え、二人は寒さにぶるぶるふるえて、草の中に立っていました。

見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、あっちの枝にぶらさがったり、こっちの根もとにちらばったりしています。風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴りました。

犬がふうとうなつて戻ってきました。

そしてうしろからは、

「旦那あ、旦那あ」と叫ぶものがあります。

二人は俄かに元気がついて

「おおい、おおい、ここだぞ、早く来い」と叫びました。

簗帽子をかぶった専門の猟師が、草をざわざわ分けてやってきました。

そこで二人はやっと安心しました。

そして猟師のもってきた団子をたべ、途中で十円だけ山鳥を買って東京に帰りました。

しかし、さつき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいつでも、もうものとおりになおりませんでした。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。